図書館学教育の諸類型

小　倉　親　雄

I

図書館についての根本的な考え方，すなわち図書館哲学（library philosophy）という言葉で呼ばれているものも，カーノヴスキー教授が述べているように，図書館そのものの在り方が，国によってさえ少なからず相違しているのと同じく，その現状はまことにさまざまであるといってよい[1]。また単に国々の間で，その考え方が違っているという許りではなく，一つの国においてさえも，実は時代的に幾多の変せんを経ており，このことは延いて図書館学教育の原則は勿論のこと，その方法の上にも，色々な類型を残す結果となっているのである。今私はここに図書館学[2]という言葉を用いたが，これとても実は，英語諸国においてさえ，用語として一定している訳ではない。すぐれた図書館員を養成することを主体として行われるこの面の教育に対しては，education for librarianship という言葉が，最も一般的に用いられているのは事実である。それにも拘らず，このライブラリアンシップという言葉自体が，「不都合に定義されなかった例は殆んどない」[3]といわれている有様で，至って頻繁に之を用いることに慣れてはいるものの，実際には，その本当の意味は明確に理解されることなしに使用されている用語の一つなのである。

図書館の専門職員を養成するためには，特別の教育と訓練とが不可欠であるということに対しては，恐らく現在異論を挾む人は存在しないであろう。しかしながら，そのもっともすぐれた形態はどうあるべきか，またその程度や基準をどこに求めるべきであるか，専門職として，その資格に社会的権威が与えられるためには，カリキュラムの構成をどのように行い，教育期間の基準をどこに求めるべきかなど，教育の実際に対する具体的な問題になると，全く帰一するところを知らないまでの喰い違いがある。例えば，この教育期間の問題にしても，日本における公共図書館の専門的職員が，僅か2カ月程度の，しかも講習という簡易捷径の方法を通じて，その資格付

1) Carnovsky, Leon : Education for Librarianship Abroad, *in* Bernard Berelson *ed*. Education for Librarianship, 1949, p. 66.

2) 現在アメリカではこの librarianship と library science, library studies の3つは，学問的には全く同義語として，そのいずれにでも置き変えて用いられるようになっている。Wilhelm Munthe によると，初期の library economy という言葉がすっかり library science という言葉にとって代られたのは1933年頃とのことであるが，然し当時の図書館学校における教科の実態を表すものとしては，C. C. Williamson が，コロンビア大学のものに付した School of Library Service という言葉が最も適当と言えるだろうと述べている。(American Librarianship from European Angle, 1939, p. 133)

3•6) Carnovsky, Leon : Why Graduate Study in Librarianship? *Library Quarterly*, Vol. 7, No. 2, Apr. 1937, p. 248, 256, 258.

与に至っている現状が，館界の反省と，きびしい世論の対象となっているのはむしろ当然としても，アメリカに於ては，5カ年間に跨る大学課程を最少限とするのが，現在の制度であり，しかも専門的な教育は，大学院のレベルにおいて行うべきであるということは，1920年代においてすでに確立された原則である。こうした教育期間の問題の外に，この国においては，大学と公共双方の図書館員に対するものを，統合教育の形で行う伝統を有つのに対し，イギリス，フランス，ドイツなどを始めとするヨーロッパの諸国に在っては，研究及び大学図書館員に対しては，特に高い基準の下に教育と研修が行われ，公共図書館のそれとは，別個の形態を有っているという風に，そこには図書館の種類による教育方法の相違がある。一方またアメリカのように，大学における教育に，すべての信頼が懸けられているものと，ヨーロッパ諸国は，今なお強い図書館内の実務体験を不可欠としているのみならず，その上に国家的な資格試験制度をおいているもの，またカリキュラムの面でも，理論を主とするもの，逆に実務面を強調するもの，あるいは双方の折衷的立場に立つもの，更らには方法や技術的な過程を強調しているものなどの違いは勿論のこと，古文書学・書誌学・文学史・古典語・外国語など，総じて歴史的主題と語学の教育とに主力が注がれているフランスを頂点とする一群の類型に対して，自然科学・社会科学を教科の中心におくソ連の方針など，あらゆる面において図書館学教育の実態には相違が見られる。

現に，ケンタッキー大学の図書館長であるトムソンが，如何にすれば東西両半球に共通する図書館学教育の類型を見出し得るか，という問題を自ら提起し，ヨーロッパ的類型の代表であり，その極点でもあるパリの国立古典学校（École Nationale des Chartes）の伝統的なものは，今やたしかにその終期に近づきつつあるという前提を加え，一方アメリカの図書館学校におけるカリキュラムに対する反省を求めながら，結局はヨーロッパ的なものと，アメリカ的なものとの双方が提供して来た最善のものを結合するという形で，この問題に答えようとしているのは，[4] 余りにも両類型の機械的折衷を基礎にした見解であり，他面また国立古典学校の終期に言及していること自体に，多くの批判を含むものではあるが，また逆に，それぞれの伝統的な類型や図書館学に対する考え方の相違そのものを認め，その教育機関としての図書館学校[5] というものは，パリの国立古典学校によって代表される伝統的な類型とは，実は別個のものであるとする立場を表明しているのは，シカゴ大学のカーノヴスキー教授である。[6] この場合彼は，図書館学校の基礎的な教育についてよりは，むしろ研究と調査を主体にした advanced training についての問題からこのことに言及している訳ではあるが，彼はこうした教育の上には，古典学校のそれの如く直接的なものではないが，その結果を，日々生起して来る図書館の諸問題に応用して行くとき，長い目で見た場合，はるかに偉大な影響を図書館発展の上に与えて行く別の研究と教育のタイプがあることを主張しているのである。こうした彼の主張は，一面においては，国立古典学校の教科

4・7） Thompson,Lawrence S. : Discussion, Education for Librarianship Abroad, by Leon Carnovsky, *in* Bernard Berelson *ed*. Education for Librarianship, 1949, p. 84, 83.

5） 図書館学校（Library School）は，higher education において行われる図書館学課程を有つている学部・学科の総称。

と，その伝統的な教育方法に対しては，至って消極的・懐疑的なアメリカ人の立場を代表していると見做され得ない訳ではないが，実はまた彼の所属するシカゴ大学大学院図書館学部が置かれている，古典学校とは異った在り方を表わしているということもできよう。

現実に存在している東西両半球の代表的類型を中心とする上述の如き，相対立した意見の相違については暫く措き，実は代表的な各類型ならびにその下部組織である小類型などに，相互の影響などを通じて，その対立や相違を彩って来たものが，時代の進むと共に，実際には次第に退色して行く姿が見られるという事実は，いずれにしても注目されねばならない重要な課題であろう。すなわち一方においては，アメリカ的な教育方法の導入を強く拒否して来たフランスのような国があるかたわら，長くそれを自国の実情には適しないものとして反撥する態度が支配的であったノールウェーが，1940年に至って，終に全面的にアメリカ方式を採用した図書館学校の開設に踏み切った事例が残されており，更らには，ヨーロッパ的類型の中でも，最も好個の対照をなすとされて来たフランス的とイギリス的なものの二つも，後者が長い期間に亘り，正規の図書館学課程を開始しようとすることに対して示して来た抵抗的な態度を克服して，1919年以来，大学における正規の養成教育の発展に意を用いるようになった以後は，両国間に存続していた異った色彩も，結局は漸次失われつつあると言われているのはその1・2の例であり，他面「われわれアメリカ人は，研究図書館職員の教育という面では，ヨーロッパ的方法の影響を，ほんの僅か許り受けはしたが，しかし，アメリカの図書館学校が，海外に対し，公共図書館の分野において与えた影響は相当重大である」[7] として，西欧への影響を大きくとなえるアメリカ人が，この国の図書館学教育の重大な転機にあった1920年代の始めに，ドイツのゲッチンゲン大学において，デイアッコ（Karl Dziatzko）によって行われた教育方法を想起し，結局シカゴ大学図書館学部の拠っている方法は，ゲッチンゲン方式とでもいうべきものだ，と評されるものとなってしまったように，この国図書館学教育の新しい開拓校となったこの学部に対して西欧の与えた大きい影響を見逃すことは出来ない。

いずれにしても図書館学は，その裏面に図書館学教育の鋳型を押したメダルのようなものだ[8] とはローズの言葉であるが，その図書館学教育もまた，ポーエルのいうように，図書館専門職に対しては，そのウイッピング・ボイズ[9] としての責任から解放されるという訳には行かない。すなわちその功罪共に，その基盤をなしている教育に対する評価が常に付きまとって来るのである。図書館学教育の問題がわが国においても，今やいよいよ重大な課題となって来た所以も，実はこの職員の問題が深刻な様相を呈して来たことに存するといえよう。

Ⅱ

各国における図書館学の教育は，現在においても，それぞれに異った形をもって行われている

8) Rose, Ernestine : The Public Library in American Life, 1954, p. 101.
9) Whipping-boys. Powell, Lawrence Clark : Education for Academic Librarianship, *in* Bernard Berelson *ed.*Education for Librarianship. p. 133.

とはいえ，またこれを大きく，ヨーロッパ的なものと，アメリカ的なものとの二つに分けて考えることができるであろう。前者は司書職というもののもっている学術的な要素が特に強調され，後者にあっては逆に方法論と技術部門が重視されている点を，両類型の最も大きな相違点として考えるのは，単にパイス[1]のみに限らないが，その外ヨーロッパにおいては，その教育が学術図書館の専門職員を対象として行われ，アメリカにおいてはむしろ一般公共図書館により多くの注意が向けられて来たこと，更らには専門職員としての資格を付与する制度上の相違が，双方における教育の在り方を異ったものとしていることなどが，その主なものとして挙げられている。

パリの国立古典学校やロンドン大学図書館学部の学科内容を，アメリカの図書館学校におけるそれと対照しただけでも，あたかもそこには国家それ自体の新旧を反映しているかの如き大きな相違がある。すなわち仏英などの古い歴史を背景としている国にあっては自然，古文書・古記録など，総じて古文献の収集と保存に伴う古文書学・書誌学に対する知識，これらの文献を実際に解読し，鑑定して行く上に必要な学問的要素が，その教育の上に強く要請されている点は，何よりも著しい対照を形成しているといえよう。これらのものは，アメリカにおける図書館学教育の開拓者デュイ（Melvil Dewey）が「古代学的」「換言すれば歴史的」と言っている学科に該当するであろうが，彼が1887年コロンビア大学内に開設した図書館学校（School of Library Economy）の教科内容中には，原則としてこのような歴史的諸学科は含めないという方針の下に，すなわち "entirely practical" を目標として発足したのである。[2] その点ドイツ人プレディークによって，「知的・学問的な教育の軽視」であると評され，「そこにデュイ学派の根本的な欠陥があった」[3] とまで極言されている点でもある。一方このような諸学科の背景をなす古典語・外国語の教科に及ぶと，ヨーロッパにおける教育の目指しているところは，勿論アメリカのそれとは格段の相違がある。[4] このような結果が，トムプソンをして「アメリカの図書館人が若し，ヨーロッパにおいて行われている司書の資格試験を一べつしたならば，その語学と文学とを重視している点に深い感銘を受けるであろう」と語らしめているところであるが，彼は更らに言葉を続けて，ヨーロッパ諸国においては，ラテン語，フランス語，ドイツ語，それに英語の4カ国語は，勿論

1) Hessel, Alfred : A History of Libraries, tr. by Reuben Peiss, 1955, p. 123. この部分は訳者に依って補記されたものである。
2) Lancour, Harold : Discussion, Historical Development of Education for Librarianship of the United States by Louis R. Wilson, *in* Bernard Berelson *ed*. Education for Librarianship, p. 60.
3) Predeek, Albert : A History of Libraries in Great Britain and North America, tr. by Lawrence S. Thompson, 1947, p. 126.
4) ロンドン大学図書館学部（University College London, School of Librarianship and Archives）の入学条件中，語学は，ラテン語についての確実な知識，仏・独両国語については参考書を自由に使用する能力となっているが（prospectus 1959-1960），アメリカの場合，修士課程の図書館学専攻学生に要求される外国語としては，普通独・仏両国語のいずれか一つ，或いはその双方，博士課程に至って一律に2カ国語となっているが，その条件は至って寛大である。例えばシカゴ大学修士課程の場合，同じく2外国語（その中一つは現代語）の読書能力となっており，2カ年以上高等学校で履修したか，1カ年以上大学で履修した証明書に依って充足される（Announcements, the Graduate Library School, the University of Chicago, Sessions of 1958-1959）

不可欠のものである許りか，1931年におけるフランスの規定では，更らにギリシャ語，スペイン語，イタリー語などで書かれた書物中に含まれている目録法上の諸問題を処理するに必要な能力が要求されていること，一方ドイツでも，イタリー語とロシア語が重視されている事実を伝えている。[5] 彼がこのような事例を列挙しているのは，言うまでもなくアメリカ的な教育への反省から出たものであって，「果してアメリカに於ける学術図書館中のどれだけが，ヨーロッパの司書たちと同程度に，語学に精通した人物を確保するための努力を払っているか」ということであったが，結論的にはこの立場から，アメリカの図書館学担当者たちに対し，教科内容についての再検討を求めようとしたものである。彼によるとアメリカにおける図書館学教育の在り方は，要するに基礎的な学科，すなわち技術的なものと公共的なサービス面，それに社会科学としての図書館学の基礎をなす教育学・一般行政学・社会学・心理学などの，二つの面をもってカリキュラムが構成されているというのである。勿論彼はこのような教科課程そのものを否定している訳ではない。むしろそれらはそのまま存続させて行くべきものではあるが，しかし同時にまた学術図書館の司書ともなれば，インキュナビラの目録記入，ギリシャのパピルス文書の時代鑑定，その他ヨーロッパの司書たちが果していると同じように，語学・文学・古文書学・書誌学を背景とし，その故に専門家としての権威を保持して来ている，そうした面を考慮して行くべき段階に立到っているというのである。ここに，ヨーロッパ的なものに対比して，アメリカ的伝統についての，アメリカ人自身による省察の一面が見られる。

他面また，ヨーロッパ人の立場からなされたアメリカの図書館学教育に対する批判としては，ドイツ，チュービンゲン大学のライプラント (Ernst Leipprand) によって，アメリカの図書館学校における教科内容が，いずれも規格品的で，程度が低く，しかももともと公共図書館を中心にして構成されたものであると評され，更らに，「他の国のものとは到底比較にならない」とまで非難されている事実をカーノヴスキー教授は採り上げている。[6] これに対してカ教授は，ドイツにおける図書館学教育は，元来学術図書館の司書を養成することに専らその主力が注がれて来，その点全く対照的であること，一時ライプチッヒのホフマン博士 (Wolter Hoffmann) によって創められたドイツ通俗図書館学校 (Deutsche Volksbüchereischule) を中心とする，公共図書館司書の養成を目的とした新しい教育活動によって，その長い伝統が過去のものとなりかけた時代がたしかに一時存在したとは言うものの，第二次世界大戦の勃発と共に，その歴史的類型が，事実上その地位を再び取り返して来たこと，具体的には，終戦の年に当る1945年，もともとはプロシャ国立図書館であった公共学術図書館 (Öffentliche Wissenschaftliche Bibliothek) 内に開校を見た新しい図書館学校では，図書館経営法や目録法など，図書館独自の学科の外は，文学と文化の歴史，それに書誌学が非常に重視されていること，文学史の面でこれをいうと，自

5) Thompson, Lawrence S. : *Ibid.*, p. 85.
6) Carnovsky, Leon : Education for Librarianship Abroad *in* Bernard Berelson *ed.* Education for Librarianship, 1949, p. 77-78.

国のものは勿論のこと，これに次いではイタリー文学史を始めとする諸外国のもの，中でもロシアのそれについては，特に別個の課程が設けられている点を，その「新しい特質」として挙げると共に，図書館学校教育の上に見られる根強いドイツの学術的伝統の結果が，ドイツ人をして自然，学術図書館員の養成という点においては，ドイツの教育基準は他の国一般のそれよりは，はるかに高度であると考えるように仕向けているばかりでなく，「わけてもアメリカのそれに対してそうである」と確信させるに至っていると付け加えている。そしてアメリカの図書館学教育のカリキュラム中には，総じてドイツのそれに見られるような強い人文科学的要素を見出し得ない点は自身率直にこれを認め，事実アメリカの学術図書館は，ドイツにおいて教育されているような人物を図書館学校には全然期待していないこと，ただここで問題となるのは，学術図書館や専門図書館は別としても，公共図書館とか，単科大学程度の図書館員に対して，果してどの程度にそのような教育が必要なのか，またどれだけそれが役に立つのかという点であるとしているのである。

こうした教科内容における学術的要素の有無から，欧米両類型の相違が云々されていると同時に，ムンテ（Wilhelm Munthe）によってなされた批判は，アメリカの図書館学のすべてが，大学における教育に専ら懸っている点に対してであった。[7] 彼の考え方によると，学生は，図書館学校に入学する前に，技術面の基礎付けを確実にする必要から，研修の制度を通じて実地の経験を有つべきであり，研修と試傭とを繰返して行く制度こそ，最も有効な教育方法であるとしているのである。その結果は，アメリカにおいて教育を受けた学生たちが，彼の国ノルウェーにおいては，一向に歓迎されないという事態となって具体的には現われていた程であった。このようにして図書館学教育と大学教育との二つが，一体の関係をもって行われているのが，アメリカ的な類型であるとすれば，学校教育と実習訓練を合したものこそ正しい図書館学教育の在り方であるとする伝統こそ，実はヨーロッパ的類型の一面であり，従ってアメリカに於ては，図書館協会に依って認定された大学の図書館学部を卒業することによって専門職員としての資格が自動的に付与されるのに対して，ヨーロッパにおいては，中央機関による統一試験が，その資格認定を個々の人に対して行う相違を生み出す結果ともなって来ているのである。

Ⅲ

しかしながら，一律にヨーロッパ的類型とはいっても，そこにはまたはっきり二つの陣営が存在している。その一つはイギリスによって代表され，ノールウェー，ベルギー，スイスなどの諸国が所属して来たもの，他はフランス，イタリー，チェコスロバキャなどによって構成されたものとの二つである。前者は実地教育主義者（practicalists）の主張が優位を占め，後者に在っては逆に理論教育主義者（theoreticalists）の考え方が支配的であるための分類であり，そこには実務の経験に教育上の信頼を大きくかけているものと，定型的な授業，すなわち理論の教授を主

7) Cowley, John D. : The Development of Professional Training for Librarianship in Europe, *Library Quarterly*, Vol. No. 7, 2, Apr. 1937, p. 177.

とする学校（大学）の教育に依存する方針を伝統とするものとの相違がある。また他面これら二つの間には，当然第三の陣営とも称すべきものが実際には存在している。それはドイツ的な物の考え方と方法に支配されて来たドイツ，オーストリアその他の諸国であるが，それは学校の教育と図書館現場の研修とを結び合わせたもの，すなわち第一，第二両陣営の折衷と考えることの出来るものである。

前述したように，イギリスにおいて長く維持されて来た図書館学教育の型は，正規の図書館学校が発足し，その発展を見るに至って，次第に変貌を遂げつつあるとは言われているものの，ヨーロッパ的類型の中においては，フランスの夫れと鋭い対照をなして，第一の陣営を代表して来たものである。すなわち実地教育主義者が支配的な勢力を長期に亘って維持し，その結果，大学における正規の図書館学教育の確立が非常におくれたのみならず，その発足当初にあっては，これに対し，館界の一般が至って冷淡な態度を示した好個の事例を残している国でもある。すなわちこの国にあっては，専門職員になるための教育の在り方は，図書館現場における実地の研修と，1893年以来図書館協会が主宰して来ている統一的な検定組織との二つが密接に結び付き，その強固な制度の下に規制されて来た典型的な形が現に尚存続しているのである。

1919年，ロンドン大学に図書館学部が創設されるまでは，どのような低い基準のものといえども，正規の学校教育は，図書館学に関する限り，存在しなかった国である。カウリー教授はこの事実について，「型にはまってしまう養成教育というものを，容易には受け容れようともしないイギリス人気質の個人主義，同時にまた，図書館人の大多数は，その強い関心を，知識の分布拡充におくよりは，むしろ技術ならびに経営の二つの面に，多く向けて来たことを反映しているものである」[1] と語っているが，一方において彼はまた，図書館協会内の教育部会（Education Committee）が，この問題について真剣な考慮を払わなかったことに対して懐疑の念を表わしいるのである。彼によると，この部会こそが，検定制度の厳重な統制行使の当事者であり，且つその試験が高い基準を維持することについて，努力を続けて来た機関でありながら，その果して来た教育面の役割と言えば，勢々図書館関係の地方的な講演会や夏期講習の後援，司書補協会（Association of Assistant Librarians）によって実施されている通信教育の助成程度のことであって，これはまことに「奇態」なことでるあとさえ述べている。このようにして，1893年，この図書館協会が，国王から，司書検定制度実施の允許を得て以来，25年間に亘り，図書館学教育の在り方を，この試験制度の下に，完全に統轄規制して来ていたといってよい。

この図書館協会によって，現に引続き行われている検定制度が，三種の試験をもって構成され

1・13・15） Cowley, J. D. : *Ibid*. p. 180-181, 177.

2） 中級試験と登録試験の2つは，事実上は別個のものである。登録試験の方は，中級試験科目の外に，書誌，閲覧者に対する図書選択の援助，図書館管理法，英文学史の4科目が追加されており，general professional examination とも呼ばれている。これに合格したものは，Chartered Librarian として登録されることが出来るために，この名称がある。アメリカの制度で言えば，basic training programs と云われているものと同じく，これのみでも専門職員としての資格が得られる一応完結する形の資格試験である。

ていることについてはよく知られている。すなわち初級（entrance examination），中級（intermediate 又は登録[2] registration examination），上級（final examination）の3段階であり，初級は認定されている大学の卒業生以外のすべてに課される英文学史と図書館学（技術と管理）の2つについて行われる至って初歩的なもの，中級は，分類及び目録法の2つに就いて，理論と実際の双方から出題され，合格者に対しては，更らに一外国語についての能力検定を経た上で，ALA（准会員 Associate of Library Association）の名称使用が許可されると共に，上級試験に対する受験資格が与えられることになるが，実際にはその受験までに，第2の外国語の能力検定が行われ，同時に最少限3カ年に亘る特定図書館内の実歴経験が要求されているのである。

上級試験の内容は英文学史（第1部門），書誌・図書選択法（第2部門），高度の図書館行政（第3部門）の3部門をもって構成されているが，第1部門の英文学史も，全領域に亘るものと，特定の時代との2つについて，全く研究的な答案が求められ，その程度の高い点から言えば，アメリカの大学で，博士課程の英文学専攻学生に要求されるものに充分匹敵すると記されている程である。[3] 第2部門も，書誌・図書選択法とはなっているものの，実際に提出される問題は，書誌学・古文書学・記録学・索引法・摘録法などを含む非常に広範多岐に亘り，第3部門の図書館行政もまた，単に図書館の目標設定・管理・組織などに限らず，図書館学関係文献にまで及んでいるのがその実情である。しかしながら，この上級試験の合格者に与えられる称号（会員 FLA Fellow of Library Association）の獲得は，いずれにしても至難なこととされており，自然大部分の人々が目指して来たのは，初級ならびに中級（登録の方）の両試験であり，FLA は依然今日にあっても，専門図書館員の最も名誉とする称号であると共に，館界指導者の大部分は，これをもつ人々によって自然占められる結果となっているのである。

このような実地の体験を基盤にした検定制度の強い伝統の中に，これとは対照的な大学教育，具体的には第一次世界大戦直後におけるロンドン大学図書館学部，次いで第二次世界大戦終了直後の1946年に7つの工芸大学内に開設を見た図書館学校[4] の2つが，この国の図書館学教育史上に，新しい局面を切り拓いて行くことになったが，後者の方は僅かに1カ年の課程であり，しかも本来は復員軍人に対する応急措置として開設を見たものである。すなわち終戦と共に，これら復員軍人に依って，初級・中級両試験応募者の多くが占められるという事態を惹起したためであって，謂わば政府によって学資を保証されたこれらの人々に対する検定試験の予備校的存在として発足したということができる。これに対して前者の場合は，純然たる大学の教育であり，この学部の創設を中心として起って来た複雑な事情は，図書館学教育の上に占めるこの国の特殊な姿

3) Carnovsky, Leon : Education for Librarianship Abroad, *in* Bernard Berelson *ed.* Education for Librarianship, p. 69, 70.

4) Brighton Technical College, City of London College, Leads College of Commerce, Loughborough College, Manchester College of Technology, Newcastle-upon-Tyne Municipal College of Commerce, Glasgow and West of Scotland Commercial College in Glasgow.

を物語っているものと云えよう。

このロンドン大学図書館学部は，1919年10月当時大英博物館の館長であったケニヨン卿（Sir Frederick George Kenyon）の司式によって開校された。プレディークは，この学部開設の前段階をなしたものとして，倫敦経済大学（London School of Economics）を中心に，かつて大学課程の図書館学カリキュラムの草案が作製されたことに言及しているが，[5] 勿論これは第一次世界大戦以前のことであり，一般図書館界の支持を得るに至らなかったものである。このような経緯が自然ロンドン大学当局者をして，その開設に至って消極的な態度を採らしめた所以でもあり，その当初からすでに多難を予想されていたものでもあった。

同学部の案内書[6] によると，「図書館協会の評議員会から受けとった勧告に基づいて，大学評議会によって創設が決定された」と記され，開設の主導的な役割を果したものは，大学当局ではなくて，実は図書館協会であった事情を伝えている。更らに詳細には，初代の学部長であったカウリーによって，「図書館協会及10カ年に亘る経済的援助を保証したカーネギー財団双方から迫まられて，大学評議会は，この学部創設に同意はしたものの，いささか気の進まないままに引き受けたものであった」とさえ伝えられており[7]，大学自体のこの消極性は，上述した倫敦経済大学などによって作製された草案に対する館界一般の支持が全く稀薄であった事実に思いを致した結果に基づいているとも付け加えている。この事情は「正規の図書館学課程を発足させることに対し，ひどく抵抗的であった」[8] とパイスによって述べられているところを，そのまま裏書きしているものと云うべきであろうが，その背景をなしているものは，言うまでもなく，実地教育主義の強い伝統に培われて来た，至って保守的な図書館界における支配的な勢力である。

正規の大学教育の発足に当って，館界の旧勢力が示したこのような無理解は，そのまま学部創立後にも持ち越され，カウリー教授も「引き続いて起って来た不体裁な喧嘩争い以上の悲しい出来事について語ることは恐らく出来まい」[9] と記している程であり，更らにこのような無理解と抵抗は，当然卒業生に対しても向けられ，具体的には館界のそれらに対する至って冷淡な受入態勢という形をとって現われている。すなわち図書館側は始めて正規に高い教育を受けて来た卒業生を，それに相応わしい待遇で受入れ得る態勢を準備する努力を全然払わなかったといい，また仮令図書館に職を得たとしても，こうした人々のすることは全部間違ったこと許りであるとされたり，悪意をも交えた，「まことに馬鹿々々しいまでの」言葉が放たれたこと，そしてこうした不人情な取扱は，単に一般職員によって為された許りではなく，図書館長さえも同様であって，ために これらの人々は，結局自分たちのもつ実力以下に，万事振舞う外はなかったと，その間の事情を詳細に伝えている。

新旧二つの思想と勢力，伝統を背景とする保守と革新との軋れきは，どの分野においても見ら

5) Predeek, Albert : *Ibid*. p. 78.
6) University College London, School of Librarianship & Archives, Prospectus 1959-1960.
7・9) Cowley John D. : *Ibid*. p. 182.
8) Hessel, Alfred : *Ibid*. p. 124.

れる現象であり，そのこと自体に特別の意味がある訳ではないが，この国における図書館学教育の発展の上からこれを見ると，これらの事実は，その後におけるこの学部の在り方に対して，大きな影響を与えている点を見逃し得ないのである。すなわちこのように見苦しい争いを惹き起した原因に，この学部の教科が，実地訓練を犠牲にした形を呈していた点が指摘されており，[10]カウリー教授自身も，教科内容が実際面において不充分であったこと，従って学部と図書館現場の双方共にひとしく過誤のあったことを率直に認めている。自然この学部は，やがてその新しい方向として，伝統的なものを尊重してこれを採り入れ，当初の方針を修正して行くことを決定したのである。1925—35年は，この学部にとっての最初の，シラバス改訂の時期に該当するが，全体としての学科構成は，ここで学術的なものと実際的な業務との二つに大別され，その両者を正しく総合して行く方針に改められ，具体的には，実際的な部門の強化と実地研修制の実施となっている。従って目録法とか分類法など，技術部門に属する学科に配当される時間数が，大巾に増強され，参考事務に関するものが追加され，図書館実務の面でも，従前の講義に代って，3週間の実地研修が課されるように変更されているのである。

いずれにしても，ロンドン大学図書館学部の創立，次いで27年後，7つの単科大学に開設されて行った図書館学科を通じて，この国の図書館学教育は，大きな転機を体験したことは事実である。すなわち長い時代に亘った現場錬成の方法が，次第に正規の学校教育に移って行くようになったことであって，1953年3月をもって，国家的見地から運営されて，伝統的な夏期学校でもあったバーミンガム，スコットランド，ウェールズのものが，それぞれ独立組織のものに改組を要求され，補助金による援助を原則的に打切られることになったのも，そうした現われであり，ストウクス教授も，司書職というものの実体がどんどん変りつつあることと，図書館学に対する教育的便宜が改善されて来たことの2つが，旧来のように唯検定試験だけを念頭においた夏期講習その他類似の課程を，最早や，それ程重要でないものにしてしまったためであると説明している[11]。

然しながら，このような正規の図書館学教育の発展も，この国伝統の資格検定制度や，図書館内において独自に行われる実地研修の慣習を根本的に変改している訳ではない。すなわちこの学部において，正規の課程を修了したものに対しては，大学としての学位（University diploma）が授与されることは言うまでもないが，しかしこれは図書館協会から授与されるALAとかFLAの称号とは全く無関係のものであり，ただこれらの人々に対しては中級（登録を含む）試験と，上級試験科目中の一部が免除されているにすぎない。一方国立図書館や大学図書館の多くのものは依然として自館内における実地養成の慣習を継続している実情である。

ロクスボロー大学図書館学校長ストークス教授は，図書館学校の専任教授者たちで結成している図書館学校委員会（Schools of Librarianship Committee）が，1952年に作製提出した意見書の内容について言及している。[12]その中では，これらの教授者たちに図書館学の進歩という

11・12) Stokes, Roy : Education for Librarianship, *in* P.H. Sewell *ed*. Five Years' Work in Librarianship. Lond., Library Association, 1958, p. 275, 274.

ことは，技術的熟練だけのレベルではなく，それを乗り越えて，一つの知的なレファレンスの領域を発展して行くことにかかっているということが今や明瞭になって来たこと，またこの意見書では，図書館学校というものは，唯単に或る資格を与えるためにのみ，教える責任を負わされて，しかもそれが旨く行っているかどうかによって，その価値が判定される教育機関という風なものではなく，何かそれ以上のものと見做さるべきであること，現在の図書館学校は，仮令その数を少くしてでも，もっと適当な場所で，より大きな規模の下に運営される方が好都合である点が強調されていると記している。このような言葉の中に，イギリスにおけるこれら学校のカリキュラムが，いずれも図書館協会において決定発表される資格試験用のシラバスに，強い支配と拘束を受けている事情をうかがうことができる。

ひとしく第一の陣営に属して来たノールウェーは，イギリスよりも，はるかに強固な実地教育主義の伝統の下におかれて来た国である。1930年代の前半期，なおこの国において行われていた一般的な方法は，先ず至って平易な哲学・神学・語学・自然科学などの問題をもってする初級試験を行って，合格者に対しては，上位職員が図書館内で実務に基づく教育を行う組織であり，2カ月間に亘る毎日2時間あての初歩教育の期間に始って，時間雇傭，定時制雇傭と，3カ年に亘る研修・試傭を経て，始めて正規の定員として採用される資格を獲得する仕組みであった。[13] 自然この国もまた独立した図書館学校の発足が非常におくれた国の一つである。その結果は，正規の教育を早くから望んでいた人々の，アメリカ及びイギリスへの遊学となり，1929年には，93名という多数の学生が，アメリカの図書館学校に入学して行ったほどであって，20世紀の始め頃から，漸次この国に抬頭して来た正規の教育機関が設立されることを望む声と，伝統的な実地教育主義を固執する人々との軋れきが，その前半期を彩っている。特にアメリカにおいて，正規の教育を受けた人々が，次第に一つの勢力を館界に占めて行くに伴って，執ように図書館学校設立促進の運動が繰返された結果，1919年に至って，文部省による図書館委員会（構成員3名）の構成として実現し，この委員会を通じアメリカ方式をもってする図書館学校の設立建議の運びとなったものの，爾後における約20年間がすなわちこの問題を中心とする賛否両論の渦中におかれた時代であった。そして国立の図書館学校が，ダイヒマン（Deichman）図書館内に漸く開設されたのは，1940年1月のことである。

当時オスロ大学の図書館長であったムンテ（Wilhelm Munthe）をもって，実地教育を基ばんとした伝統的な教育方法の重視を終始固執した代表的な人物とすれば，ベルゲン（Bergen）の市立公共図書館長であったキルダル（Arne Kildal）は，新しい教育方法を提唱し続けた最も強力な人物である。またムンテは1936年の9月から11月に亘り，カーネギー財団の援助のもとに，アメリカの36州，カナダの4州に及ぶ広範な地域に及んで，図書館事情を視察し，「ヨーロッパ人として見たアメリカの図書館」[14] と題する至って評価の高い書物を著した人ではあるが，教育

14) Munthe, Wilhelm : American Librarianship from a European Angle; an Attempt at an Evaluation of Policies and Activities. Chicago, ALA, 1939.

の問題に関する限り，彼の主張して来た立場は，この書においても，いささかも変更されていない。彼はノールウェーにはまた，この国としての独自の教育方法というものがあり，従って外国的な方法は結局この国の実情には適しないという考え方から，多数の若い人々がアメリカの図書館学校に学ぶことに対しても，「アメリカ的に教育された図書館員は，アメリカ的な理論・書物・事物で頭を一杯にして帰って来る訳だが，然し彼らは，自分の国自体のことについては，実のところ，何一つとして学んではいないのだ」[16]と述べ，彼がその長の任にあったオスロ大学図書館員の欠員補充に当っては，依然として実地教育と試傭期間による方法が効果的であることを主張し，この一貫した彼の態度は，1953年その地位を退く迄，不変に持続されたものであった。[16]

これに対してキルダルは，自身アメリカに於て，デユイのニユー・ヨーク州立図書館学校に学び，1900年に帰国した人であり，1919年文部省に設けられた図書館委員会の委員となり，1937年には，政府の図書館主管部局の長として，この年改組された新しい図書館委員会の長を勤め，この委員会によって再びアメリカ方式を採用した図書館学校の創設建議が行われている。しかしこの委員会を構成していた7名の委員中，3名までが，いずれもキルダルと同じく，ニユー・ヨーク州立図書館学校に学んだ人々であって，その事実がよく時代の推移を物語っているといえよう。

新しく発足した図書館学校は，2学期制を採り，そのカリキュラムも，アメリカのそれに準じ，分類法にはデユイ十進法を，また件名標目表としては，シァーズ(Sears)のものが講ぜられるという有様であり，1952年に至って，始めて専任の校長としてワン (Mrs. Gerd Wang) が任命されているが，彼女もまた1928年にコロンビア大学図書館学部を卒業して帰国した人である。

然しながら，この国立図書館学校も，結局公共ならびに学校図書館を対象とした教育機関であり，学術・大学図書館側は，この新しい教育方法に対しては依然として，殆んど無関心であり，この国における最大で，また重要な学術図書館でもあるオスロ大学図書館は，従前のままに，自館内における独自の養成教育を維持している有様である。デントン教授は，学術図書館側のこの無関心について「ノールウェー図書館人の有つアメリカ的教育に対するある程度の反撥と抵抗」[17]の事実があることを指摘し，併せてムンテの一貫した上述の立場に触れている。ここにヨーロッパ的類型中，第一の陣営に分類されて来たこの国において，その伝統的なものと，新しく導入されて来たアメリカ的類型とによって生じた鋭い対立の好例が提示されているのである。

Ⅳ

第一の陣営が強い実地教育の伝統に立つものであるのに対して，フランス，イタリー，チェコスロバキヤなどによって代表される第二の陣営は，逆に理論主義的な教育者が，支配的な地位を占めて来た国々をもって構成されている。そしてその棟梁的な存在はいうまでもなくフランスであり，更らに具体的にはパリの国立古典学校であるが，ただ1932年以降は，文部省令をもっ

15・16・17) Danton, Periam J. : United States Influence on Norwegian Librarianship, 1890-1940. Berkeley & Los Angeles, University of California Press, 1957, p. 69.

て，司書専門職員に対して新しく与えられることになった国家的な称号，すなわちこの年古典学校における伝統的な教科内容に追加されることになった新しい諸学科を併せ修了した上で，3カ月間の実習を終った人に対して授与される新制学位 "Diplôme Technique de Bibliothécaire" を中核とする教育ということができよう。

この国立古典学校が，この国の図書館界に与えて来た影響は，直接にはこの学校が，長期に亘って，図書館の幹部職員養成の独占的な機関として，また実際には主要な公共図書館における重要ポストの補充に当っては，ここの卒業生の有つディプロームによって，その大部分が占められ，重要人事に対する優先権を常に享受して来た事実に基づいているのである。

この学校が現在の地[1]に移されるまでには，色々な変せんを辿っているが，現在この学校の卒業生に対して与えられる学位は "Archivistes-Paléographe" であって，古文書・古記録に関する専門的な学位であり，1932年図書館員を志す者のために特に付け加えられた別個の学科による改訂にしても，それらは実際には特別学科の形であり，それに依って本来のものに変更が加えられたという意味ではない。所詮この学校が伝統的に維持して来た教育目標は，アーキビストならびに学術図書館員の養成を対象としており，自然その教育はフランスの歴史と修史学を基本とし，これに古文字学・書誌学・古文書学・民法及教会法などを加えた諸学科をもつて構成されている。1952年の教授陣7名の担当講座は，ローマンス言語学，フランス政治機関史，中世考古学，法律史，フランス史関係書誌及記録，古文字学，フランス史料となっており，1957年においてもその内容には殆んど相違がない。[2] 要するに歴史的な諸学科で固められており，これのみでは，現代的な意味における図書館学的関心を全くうかがうことの出来ないものである。

カーノヴスキー教授は，この学校の卒業生に対して与えられる「有名な学位」という言葉に対して，「言い換えて見れば，悪名の高い学位」[3] だといっているのは，上述の如く，この学位を有つ人々によって，館界の枢要な地位が殆んど独占されてしまう事実が，次第にきびしい批判の対象となって来たことに基づいているのである。1932年という年は，この古典学校が，多年に亘って享受して来た特権と，一方ではその教科内容の非近代性との双方に向けられて来た図書館界の不満が，結局文部省を動かすことに一応の成功を見た年であり，具体的には図書館人協会の一部の要求が認められて，古典学校の教科に対する部分的な改訂が実現し，特別学科の形ではあるが，書物の技術と歴史・目録法・書誌及書目学・図書館行政という，4つの主要な分野についての学科が，図書館の専門職員を志す人々に新しく課されることになった年でもある。然しながら実際には，この特別学科の内容にもまた依然としてこの学校の伝統的なものが強く反映されている点から，カーノヴスキーも，「これでは到底不満を抱く分子を満足さす訳には行かなかった」と述べており，カウリーもまた，全部で50単位の中，書誌学的なものが60%の多きを占め，分類法に至っては僅かに1単位，目録法にしても6単位にすぎない事実を挙げて，その教科編成に

1) 19 rus de la Sorbonne, Paris V.
2) Minerva 1952; The World of Learning 1957.

おいては，歴史的なものと，技術的なものとの双方に配当されている時間数が，驚くほど不平等な関係におかれていることを指摘している。[4)]

このような古典学校の実情に対して向けられた館界の運動は，単に教科内容の改訂を迫ったのみに止まらず，同時に近代的な図書館の要求に即応する形で，別個に図書館学校を創設する運動として展開され，終に1930年に至って，パリ市立図書館学校（École municipale de Bibliothécaire de Paris）がフォルネ（Forney）図書館内に開設されることになったが，その教科は，教育と実習の2つを組み合せ，国立古典学校の教授内容を補足することを目標として，同館の館長アンリオ（M. Henriot）に依って作製されたものであるが，内容は，書目，参考事務，図書の受入，目録法，図書の装備（製本・文字記入・捺印を含む）など，要するに小図書館の要請を考慮に入れた低い基準のものであり，しかも財政上の困難を理由に，1936年をもって休校の止むなきに至っている。自然この年に新しく発足した同じくパリ市内のカトリック学院（Institute Catholique des Paris）内の図書館学校に継承された形となっているが，共に，小図書館の職員を養成する教育に重点をおいている点においては相違がない。

このような新しい運動が，国立古典学校に対抗またはこれを補う形で，1930年頃を中心として展開されたにも不拘，学術的な図書館を対象とした専門職員の教育は，依然として古典学校において行われており，その点第一の陣営ならびにアメリカ的な類型に対して，鋭い対照をなしているのである。すなわちイギリスが実地の体験に深く根ざした伝統を依然として強く保っているのに対して，この国は，学校という定型的な教育をその伝統としており，アメリカの技術的実際面の重視に対しても，著しく学術的であり，特にアメリカ的な方法が終に稔ることなく，この国においては立枯れてしまった事例を残している。これに対しては勿論色々な解釈がなされてはいるものの，矢張り両類型の根本的な相違から招来された結果と見なければならないであろう。すなわち1923年パリに，むしろ国際的な性格をもって，アメリカの援助，アメリカ図書館協会の直接支援による図書館学校（École de Biliothécaire ; American Library School）が設立されて，6年間に亘って運営され，25カ国から集って来た学生に対して，すぐれた教育が行われたと言われているにも拘らず，1929年アメリカの援助打切りと共に，廃校となり，フランス自体による継続運営のことは，終に実現を見るに至らなかったという事実である。この学校は校長にアメリカ人を充て，教授団には米・仏両国人が加わり，全くアメリカ的方式をもって，図書館の経営，技術的サービス，図書（その歴史，選択法，読書指導，児童図書）の三部門を中心とする学科でカリキュラムが構成されていたのである。その廃校を決定的なものとしたのは，言うまでもなく，フランス側において，別個にこの国の必要に合致した新たな図書館学校を設立するという提案がなされたことによるものであるが，ことの真相は，むしろ強いナショナリズムが，図書館学

3･5) Carnovsky Leon : Education for Librarianship Abroad, *in* Bernard Berelson *ed*. Education for Librarianship. p. 72.
4) Cowley, John D. : *Ibid*. p. 184.

教育の世界にまで滲みこんでいる結果であるとも言われており，いずれにせよ，2つの国の文化的伝統が，比類ない形で相違している場合，どんな教育計画といえども，それが移植されようとする場合に起って来る不満の具体的な事例を，この国は提示しているものだとカーノヴスキーは述べている。[5] この点ノールウェーと全く相反する事情をここに見ることができる。

V

ヨーロッパ的類型に対して，アメリカ的なもののそれを，方法論と技術部門の重視，公共図書館中心主義，大学教育に全面的に依存した資格付与という4つの観点から，多く論ぜられていることについてはすでに言及した。そして「大いなる革命」[1] といわれるものを経て，メルビル・デュイの強力な指導下に入った1887年から，1926年に至る約40年間は，いわゆる「デユイ時代」と呼ばれているものであるが，この期間は，アメリカ的な類型がその基礎を固めた時代であり，これに次ぐいわゆる「ウィリアムソン時代」，すなわち1926年間から1948年に至る約25年間は，その起点を，長くデュイの主導下に築き上げられて来たものとの，はっきりとした袂別に発していると言われてはいるものの，要するにデユイ主義に対する一つの反省批判の時期である。ある人はまた図書館学校のカリキュラムという面から言えば，ウィリアムソンによる部分的修正の時期であるとも述べている。いずれにしてもこの時期は，この間に誕生したアメリカ図書館学教育の「極点」とされ，他面ウィリアムソンが抱き，同時に実施を勧告したものの或る程度の実現であるとされるシカゴ大学図書館学部が，その科学的な教育を意図しているという点では，「いささかゲッチンゲン方式」[2] とも称すべきものであると評されているように，この間アメリカの図書館人中に，次第に高まって来たヨーロッパ的類型との比較対照から来る影響を見逃すことは出来ないであろう。とに角ウィリアムソンによって，この時期に，従前とは全く異った考え方が，図書館学教育の上に打ち出された[3] には違いないが，彼が理想とし，勧告書として具体的に表明したものの実現は，勿論長い期間と，多くの過程とをその間に予想したものである。従ってこの時代よりすでに30年以上を経た今日は，また新しく一つの過渡期としての様相を現わしているということができよう。第二次世界大戦の終結した翌年頃を起点として，アメリカの図書館学校における「新学位規程」を中心とする複雑な諸問題がすなわちそれであり，その意味においても現代は，ウィリアムソンの思想に対する再検討が非常に盛んであり，これに対する厳正な修正こそ，その正しい出発点であるともいわれているのである。

デュイとウィリアムソンは，兎角相対立する観念の下に考えられ勝ちな人ではあるが，然しウィリアムソンは決してデユイの偉業そのものに対して，目をふさごうとしている訳ではない。彼は，デュイが抱いていた図書館学教育に対する根本的なものに触れる手がかりとして，一つの挿

1) Danton, Periam. J. : *Ibid*, Preface.
2) Predeek, Albert : *Ibid*., p. 126.
3) Bryan, Alice I. : The Public Librarian. N. Y., Columbia Univ. Press, 1952, p. 310.

話を掲げてこれを詳細に説明しているほどである。[4] すなわちデュイがコロンビア大学の図書館長であった当時，この図書館について記述しようとした時，彼はその「数え切れないほど」のすぐれた蔵書自体については一言も言及せず，建築と設備・暖房・換気・照明・閲覧者に対する快適な雰囲気と便宜とを保障するために工夫して来た数多くのこと，目録と分類表，図書館規程，また閲覧者が，時間を浪費することのないよう彼自身が考案した色々な工夫などについてのみ書き綴ったというのである。彼はまた言葉を続け，デュイが実施に移して行ったコロンビア大学図書館学校のカリキュラムは，ひどく実際的なものであったとしても，また彼自身ここで行った講義が，図書館運営の細かすぎる点に関係することが多かったとしても，彼にとっては，一つの目的に到達するためのそれは手段であり，結局若い男女に対し，自分の抱いていた図書館奉仕についての信念を伝えて行ったという点においては立派に成功を収めた人であったと語り，人々はデュイをただ余りにも偉大な Standardizer として，また図書館の仕事の骨組み，その用品を重視した人という風に，一つの偏見をもって眺めようとする傾向があることを指摘しているのである。

デュイによって，世界最初の図書館学校として開設されたものは，前にも述べた如く，全く実際的なものの教授を目的としたものであった。次いでこの大学を去り，オールバニ（Albany）市に移転して，ニューヨーク州立図書館学校となった後も，リチャードリンによって，この学校の目的は，ライブラリー・エコノミーについて教えることであった[5] と言われているように，主として図書館の設立，組織，運営の三点を中心とした教育内容であり，それでは到底「図書館学の全域に亘っているなどの言い分を殆んどなしていない」ものであったことも言を俟たない。従って，その学科が，「知的なものの貧困」を伴っていたことも当然というべきであろう。ウィリアムソンも述べているように，このような実際的な面こそ，実はデュイの「創造的遺産」であって，例えば，目録カードの規格化，記入書体の統一など，事は些細な単なる形式の如くに思われるものでも，今日においては，それらのものを通じて，人々は，デュイが如何に後世に寄与したところが大きいかを，而も彼がコロンビア大学の図書館長に就任した1883年頃においては，それが尚更重要なことであったかを，兎角忘れ勝ちである点の反省が求められねばならないとしている。要するに彼の教育は，ランクワも言うように，その前段階として存在していた見習制のそれに対して，新しい光を与えた enlightened apprenticeship 以上のものでは到底あり得なかったとも言えるであろう。

デュイが直接学生を対象として，その教育活動を行ったのは，コロンビア大学における2カ年足らず，すなわち1887年1月から翌年12月に至る間，ならびにオールバニにおける19年間，すなわちアンダーソン（Edwin Hatfield Anderson）にその地位を譲り，55才で退任するまでの合

4・9) Williamson, Charles Clarence : Melvil Dewey ; Creative Librarian, *in* Fifty Years of Education for Librarianship (Illinois Contributions to Librarianship No. 1) 1943.

5) 1890年 E. C. Richardson が，New Hampshire Conference で述べた言葉として引用されている（Bernard Berelson *ed*. Education for Librarianship. p. 60.）

計20年余りであるが，コロンビアの学校も，半ば非公式な課程であったし，大学当局が彼に示した極端な無理解と，この学校に対して執った「侮辱的な取扱」が，終に彼の辞表提出，次いでオールバニへの転出となった訳であったが，いずれにしてもこの国においては，図書館学の教育機関を将来どのように発展させて行くかという点になると，館界の世論は比較的統一した方向を早く見出したという点は注目されねばならないであろう。[6] 1883年バッファロー市において，図書館協会の会合が行われた際，デュイによってなされた学校設立の構想発表に，この国図書館学校の歴史は始まる訳であるが，この提案に対する論議中には，この種の学校はその性質上，大学の中に設けられるのが最も適当であり，ハーバードこそは，その目的に最もふさわしい大学であるとする意見が圧倒的であったと伝えられている。勿論コロンビア大学内にその最初のものが誕生したのは，デュイ自身がそのように計画したというよりは，実は偶然のもたらしたものであったとも言われてはいるが，[7] それにも拘らず，彼自身また図書館学校は，他の学科と同じように，それ自体で独立して存立すべきものではないとの強い信念を抱いていた人である。ニューヨーク州立図書館学校37年の歴史の中には，勿論いろいろな変せんが見られ，その間，漸次その程度を高めて，1902年にはその入学資格を，4年制大学の卒業生に限る大学院課程のものとはなったものの，予算は州立図書館に依存し，一方では州立大学の外局的存在として取扱われ，結局デュイが当初から抱いていた上述の理想は，彼自身が経営の任に当っていた期間中には実現を見ず，1926年に至って，コロンビア大学に併合されて始めてその実を結んだ結果になったが，この年はすでに彼にとっては，多難であった80年の生涯を閉じる5年前に該当する。その当初，無慈悲な取扱の下に去って行った学校が，彼の理想を充たす形で，再びこの大学に帰って来た経緯は，ドウによって，「建築家が，要らないものとして取り除けてしまった石が，コロンビア大学の学問的城塞を高く築き上げるために持ち帰られた」と，比喩的に，しかも極めて的確な表現が行われている。[8] このように図書館学の教育は，大学の一部として行うべきであるという圧倒的な意見が，その出発において見られたにも拘らず，19世紀から今世紀への転換期までに，デュイの教えを受けた人々によって，次々に開創されて行った3つの教育機関，すなわちシカゴから来て，コロンビア大学の最初のクラスに加ったプランマー（Mary Wright Plummer）により，1891年ニューヨークのブルックリンに開設されたプラット学院図書館学校（School of Library Economy at Pratt Institute），オールバニの最初のクラスに加わったクレーガー（Alice Bertha Kroeger）により翌1892年フィラデルフィアに設けられたドレキセル学院図書館学校（Drexel Institute Library School），更らにはプランマーと同じくシカゴから来て，オールバニの第2回目のクラスに参加したシャープ（Katharine Lucida Sharp）が，シカゴに開設したアーマー工芸学院

6) シカゴ公共図書館の W. F. Poole はデュイの提案に最もはげしい反対を唱えた人として有名であるが，Smith, Mann, Cutter, Merrill, Carr, Green, Crunden などの多くの指導的図書館人が賛同している（Dawe, Grosvenor *ed.* : Melvil Dewey ; Seer : Inspirer : Doer. N. Y., Lake Placid Club, 1932, p. 325, 203.）

7) Bryan, Alice I. : *Ibid.*, p. 302.

8) Dawe, Grosvenor *ed.* : *Ibid.*, p. 196.

図書館学校（Armour Institute Library School），これら3人による事績は，デュイに次ぎ，「図書館員の専門的な教育を開拓して行った，すぐれた婦人たちに依る三重奏」[9] と言われているものであるが，然しそのいずれも，その当初においては，大学とは全く無縁であり，デュイのそれも，結局大学との絆を断ち切られる形になったことは，この国が後に確立して行った原則と対比してまことに興味深い。即ちいずれも工芸学院の名をもつ技術的な教習機関において陽の目を見たという事実である。図書館学校が実は，非常に実際的な目的と方法とに負うところが多い事実に加えて，大学における教授団は，当時この国に在っても，こうした性格のものを，大学教育の中に加えて行くことに対して至って消極的であったその保守性に因っていることはいうまでもないが，それに対して正面から挑戦し，部分的ではあり，而も2カ年という至って短い期間であったにも拘らず，一応の成功を獲ち得たものとして，デユイの名が，この観点からも，また高く掲げられているのである。然し実際には，シャープによってシカゴに設けられたものが，5年後の1898年現在の地アーバナ（Urbana）のイリノイ大学中央図書館に移され，大学教育との一体的な関係が実現したことをもって，「大学が図書館学校を保障することの重要性を感ずるようになった嚆矢」であるとしているのである。

デュイのコロンビア大学における最初のクラスに集って来た人は，10名程度とする彼の予想に反しその倍数，2年目は100名近い応募者があって，その処理に窮したといわれており，こうして19世紀中には僅かに4校にすぎなかった図書館学校も，1917年になると14校，その中には，イリノイ，シモンズ（ボストン），ウェスタン・リザーブ（クリーブランド），シラキュウズ（ニュー・ヨーク），ワシントン（シアトル）などの各大学中に設けられた5つの学校が含まれており，9校は大学外のものである。この数が1921年になると，学校数18，新しくテキサス（オースチン）カリフォルニア（バークレー），バッファロ，ウィスコンシン（マディソン）の4大学に開設されたものが加って，この時代から両者の比率が逆転して行くのである。ヨーロッパ的な類型とは異って，大学教育にその全部を依存して行くこの国の特質が，その基礎をこの様な形で漸次確立して行ったのである。

この国において，1958年図書館学の学科を設けている大学の数は563校，その実態は勿論様々である。然しながらこれを大きく9つの種類に分けて考えることができる。[10] その中最も高度な課程，すなわち博士課程をもつものも，従来のシカゴ，イリノイ，ミシガン，コロンビア，ウェ

10) Rufsvold, Margaret I. : Standards and Guide for Undergraduate Library Science Programs. *ALA Bulletin*, Oct. 1958. これら学校の内容は次の9種に分類することができる。
(1)4年制課程中で司書教諭を志す人のために，ほんの2～3単位から，18単位程度のもの，(2)同じく4年制課程中で，学校図書館の専任司書を志望する人を対象とする24単位程度のもの(3)短大水準で准専門職の人を養成する課程，(4)新制度修士課程（New Masters' Program）や博士課程のいわゆる前庭教育（Vestibule programs）として，同じく4年制課程中に行われるもの，(5)大学卒業生に対する1カ年課程として，図書館協会によって Type Ⅱ として分類されて来たもの，(6)大学に於ける6カ年課程に跨っていた旧制修士課程で Type Ⅰに分類されていたもの，(7)4年制課程中の1カ年課程として，Type Ⅲに分類されて来たもの，(8)大学に於ける5カ年以上の課程に跨る新制度修士課程，(9)博士課程。

スタン・リザーブの6大学の外に，最近ラトガス（ニュー・ジャージ州，ブランズウィック）大学が新に加わって，合計7大学に及ぶに至っている。

VI

コロンビア大学の准教授ブライアンは，デュイの心に描かれていた図書館学校の実態はどのようなものであったかに就いて，二つの面から之を考察している。すなわち彼女によると，[1] 何よりもそれは，図書館業務の技術的な処理，特にその統一技術（uniform techniques）を教える場所，次に，共通分類法とか目録法について教わった人々が，そうした統一的なものを普及するためにここを巣立って行く一つのセンターという風に考えていたというのである。従って彼によってコロンビア大学内に設けられた学校が「本質的な革新」であったといわれるその意味も，要するに見習制時代に於ける一館的訓練の方法を打破し，その外にあるものを教えた点にあるとしているが，然し実際には多くの時間が実務と非常に狭い範囲の観察に専ら充てられたと言い，初期の図書館学校はいずれもこのデュイ的方法の影響を受けて，それ以外に出でなかったと付け加えており，ウィルソンもまた「デュイ的伝統」を「極端な技術」という言葉に置きかえている[2]。

このような期間に続くウィリアムソン時代というものが，彼によって1921年に完成され，23年に公刊を見た報告書[3] をもって，当時の図書館学教育界に与えた「落雷の如き」衝撃，またこの報告書で行われている主要な現状分析の結果をもって，長くデュイの主導下に築き上げられて来たものとの，「はっきりとした袂別」[4] に始まるとすれば，この時代は結局2つの面から，その特質を把握して行くことができるであろう。その一つは図書館学教育に対する基準の向上であり，他は教育内容の改善である。前者は要するに図書館学の背景を少くとも大学における4年制課程の一般教育の上に置き，図書館学それ自体は，大学卒業後の1カ年に置くべきであるという強い主張を中心として，付随的にはその学科が，4年制課程中に，くっつけた形で設けられたり，特にそれが教育機関にあらざる州立・市立図書館などの奉仕機関内において行われることを不当とし，更らにはまた仮令大学内に置かれる場合にあっても，一つの部局（学部）として運営されて行かねばならないという勧告的な結論に導いているものである。彼がこの報告書本文の最後の章（第19章）を綴るに当って，「この報告書の最も重要な結論」という言葉を用いている2つの個所は，すなわちこのことに就いてである。

彼は繰返し，図書館学教育の如きは，先ずその基盤として広範な一般教育を要求することを述べ，そのためには，他学部の諸学科教授団との密接な関係，種々の学術資料や研究施設の充分な利用の2つを前提とした教育でなければならないことを力説しているのである。現カリフォルニ

1・4) Bryan Alice I. : The Public Librarian. p. 302, 307.
2) Wilson Louis R. : Historical Development of Education for Librarianship in the United States, *in* Bernard Berelson *ed*. Education for Librarianship. p. 56.
3) Charles C. Williamson : Training for Library Service ; a Report Prepared for the Carnegie Corporation of New York, 1923.

ア大学図書館学部長デントン教授も，初期における多くの図書館学校は，高等教育機関からは全く独立の形で創立され，そうした措置が如何に学校にとっては教育上不利をもたらすかが，やがて自明のこととなっては行ったものの，結局図書館学校が大学の中に設けられるようになった抑々の原動力は，専らウィリアムソン報告の結果によるものであるとして，その功績を讃え，同時に，それが不可欠である理由を更らに詳細に論じている。[5] 彼は何よりも先ず，図書館学校が大学から独立しているということは，必然的に，知的なものから遠ざかって終う事を指摘した後，図書館学校は，その性格から言っても，当然技術部門以外の諸学科との関連を持続して行かねばならない点，言い換えると，文学・経済学・社会学・政治学・歴史学・書誌学の如き分野への関心，そうした学問の発展から離れて，それだけで独自に存立して行けるものではなく，大学の一部として存在することによって，教授団も学生も共に，他の学部や研究所の人々が有つ知識を吸収する機会が与えられ，思想の接触を通じて，研究と教育の上に，常に新鮮さが期待されるとしているが，もっと切実には，文献資料の豊富，学生に対する学位授与権，高い教育基準の維持という3つの点においても，絶対にそれが必要であると述べている。

後者における教育内容の改善は，前時代の教育一般，わけてもデュイの主導下に置かれて来た教育方針に対するものであった。彼はデュイ及びその影響を蒙った人々の教育は，専門職的な業務と，書記的な業務との間に，何ら明確な区別を設けることなしに，ただ図書館業務の全般に亘って学生を教育することに置かれていた点を指摘しているのである。彼はこの二つを詳細に分析した上で，この双方がその性格，訓練の方法共に全く別個のものであること，図書館学校というものは，書記的なものではなく，専門職として必要なものを教育する機関であり，従ってこの明確な観点から，その教育内容を限定して行くべきものであるとしているのである。

このウィリアムソンは，1926年コロンビア大学に再出発することになった新図書館学校（School of Library Service）の初代校長となった人であり，1943年ホワイト（Carl M. White）と交替してその任を退くまで，17年間に亘って，この新しい学部と大学図書館との運営に当った人であったが，この大学の図書館長・図書館学部長・教授という3つの肩書において，デュイと全く同一であり，自ら「その後継者たるの名誉を担っている」[6] と述べている通りであるが，その間正に39年，時代の変異がもたらした奇しき因縁を現わしているということが出来よう。しかしながら彼は元来社会学者であり，図書館界に入ってからは，ニューヨーク市立公共図書館の社会・経済部門の主任となり，この報告書を刊行した当時は，ロックフェラー財団の情報部主任に転じていた時である。報告書はすなわち同財団の援助を得て，全米の図書館学教育機関を，図書館内で行われている所謂トレイニング・クラスや，夏期学校に至るまで細部に亘って，その実態を調査したところを基にしており，同時にその改革すべき諸点について勧告したものであるが，この作製については別に顧問委員会（Advisory Committee）が設けられ，議院図書館の

5) Danton Periam J. : Education for Librarianship. Paris, Unesco, 1949. p. 7-8.
6) Charles C. Williamson : Melvil Dewey.

パトナム館長（Herbert Putnam），ヴァンデンビルト大学（ナシビル近在）のキルクランド学長（James H. Kilkland），ニューアク・アカデミーのファランド院長（Wilson Farrand）などが委員となって協力し，報告書の校閲に従ったものである。この報告書は何よりも事実の証憑性，また現存していた教育機関に対してなされた真正な批判，同時に改革すべき将来の課題を直截に勧告している点で，その権威を保ち，甚大な影響を与えたものである。

Ⅶ

ウィリアムソン報告の影響，またその結果として招来された2つの主要な出来事を中心として彼の時代を特徴付け，次の時代とこれを対比して，図書館学教育の発展に連る一貫したものを考察して行くことは，この場合最も適切な方法のように思われる。ここに2つの出来事と記したものの中，その1つは，彼の報告書が公表された翌1924年，アメリカ図書館協会内に，図書館員教育部が創設されたことであり，他は更らに2年後，シカゴ大学に大学院図書館学部（Graduate Library School）が発足したことである。前者は1952年に改組されて認定委員会（Committee on Accreditation）と改称されて今日に至っており，後者はこの国における図書館学教育と研究との極点に立つ Super-school,[1] 同時にフランスの国立古典学校と相並んで，世界における図書館学の両極とされ，1930年から50年に至る20年間，図書館学博士を社会に送り出した唯一の大学であり，[2] 他面また大学の精神と組織の双方に，立派に歩調を合せて行くことによって，デュイ的伝統の極端な技術主義を離脱することの出来た学部であるといわれているものである。

ウィリアムソン報告は，図書館学校の問題に付随して，図書館の職員が，専門職としての社会的権威を維持し，その地位を自らの手で護って行くことの必要についても言及し，その方法として，教育基準の設定，それを基にした図書館学校の認定問題，その事業を推進して行く公認機関の設立をも勧告しているのである。彼はこのような中央機関の存在によって，専門職としての社会的信用を獲ち得るとした許りではなく，低い基準をもって行われている図書館員養成諸機関の向上と発展を促進する上に有効な措置でもあるという言葉を付け加えている。このようにして図書館協会内に上述の教育部が発足する端緒を開いたのである。[3]

この教育部に依って設定された認定基準は，今日まで3回(1925—26, 1933，1951)に亘って公表

1･5) Munthe, Wilhelm : American Librarianship from a European Angle, 1953, p. 144, 132.

2) 1959年中までに，図書館学博士を授与されたものの総数は129名，その中89名がシカゴ大学であり，残り40名の内訳は，ミシガン19，イリノイ13，コロンビア7，ウェスタン・リザーブ1の割合である。(Danton, Periam : Doctoral Study in Librarianship in the United States, College and Research Libraries, Vol. 20, No, 6, Nov. 1959)

3) Board of Education for Librarianship (BEL). 勿論図書館協会中には，1883年すでに，図書館学教育に関する問題一般について研究する特別委員会が発足し，1903年には常任委員会となり，1923年臨時教育部に改組され，翌24年上記のものに改組された経過を辿っているが，それ以前のものとはその機能及び任務を全く異にする別個のものである。

4) 1925—26のものを，Minimum Standards for Library Schools, 1933年のものを Minimum Requirement for Library Schools, 1951年のものを Standards for Accreditation と呼んで区別している。

され,[4] その間順次基準を高め，他の専門職との関係に留意されて来ているが,要するにそれらは最低基準に外ならない。1925—26年に決定発表された基準の要素をなしているものは，(1)学位授与権を有つ教育機関の一部となっていること，(2)学部長及び教授団は，他の学部の職員と同列の基礎の上に置かれていること，(3)学科課程は，全体的に均衡を保っていること，(4)教育計画は，学生の授業負担に無理を生じないよう慎重に考慮されていること，(5) 人件費ならびに備品費とも，独立予算が確保されていること，(6)学生は，その人物ならびに学力に基ずいて選抜されていること，の6項目であり，ウィリアムソン報告の精神が大きく織りこまれているのを察知することができるものである。この基準が発表適用されることによって，当時存在していた図書館学校は，認定校となるもの，その認定校から洩れるもの，認定の対象となり得ないもの，協会とは無関係な形で存在するものの4種に大別される形となったが，同時にこの認定業務が，反対意見を多く基にした批判と抗議をその後捲き起し，特に図書館学校協会との間に生じた「公然たる敵視」も，実はこの業務に胚胎しているとまで言われている。[5]

この協会教育部に依る認定審査は，主として3つの実際的な手続を経て，現在においても同様に行われている。すなわち，それぞれの学校から直接この教育部あてに提出される申請内容に対する書類審査，小委員会（Visiting Committee）による実地調査，これに諸情報を加えての総合審査によって可否が判定される至って煩雑な業務となっているものである。従って認定校の数には常に変動を生ずる。1925—26年の第1回基準が適用されて認定された学校の数は20校，1933年の基準では，この20校を含めて合計38校であるが，その中の36校が現在なお存続しており，1951年の基準による現認定校は32校である。[6]

1948年という年をもって，ウィリアムソン時代と次の時代とを画する年であるとされているのは，この年をもって図書館学校の再編成が漸次行われるようになった重要な年と見做す見解によるものであるが,直接には,1933年に制定された認定基準ならびに，その第2回目から認定校を3種（Type Ⅰ～Ⅲ）に分類して来たことが，事実上その意義を失ってしまい，ために，図書館協会は，その認定業務を一時中止し，同時に，別の立場をもってする新基準作製の必要に迫まられたことに基ずいているのである。それに関する協会側の声明によると，[7] その理由として，1933年の基準，特に3種に分類することに本質的にも弱点が存していたこと，図書館学の教育組織が，次第に修正され，事実上すっかり変ったものとなって来た2つの事情が挙げられており，このような兆しは，実は終戦の翌1946年頃を中心として急激に高まったものであり，図書館学校の教科

6) 第2回の認定は，実際には第1回の認定校20を除く現存の16校に対して，1934—38年の間に9校，1941—43年の間に3校，1946—48年に4校と間歇的に行われている（上級1，中級2，下級13）。36校の内訳は，上級5，中級18，下級13。3種の分類については，上級（Type Ⅰ）は最低学士号の所持者を入学資格とする1カ年以上の課程，中級（Type Ⅱ）は4年制大学の卒業生に対する1カ年だけの課程，下級（Type Ⅲ）は，1カ年の課程ではあるが，必ずしも4カ年の大学課程の修了を入学条件としないものである。

7) Board of Education for Librarianship : Proposal for Accrediting Professional Programs ; a Statement of Policy. *ALA Bulletin*, Jan. 1951.

に対する重大な変更を課題にした試験期がここに到来し，現代はすなわちこの新しいカリキュラムならびにこれに伴う新しい学位授与規定の「試験的変更」の時代とされているのである。[8)]

1933年の基準に向けられた批判の第1は，下級図書館学校（Type Ⅲ）として分類され，協会によって認定されて来た13校に対するものであり，他の上級・中級共に，大学課程の第5学年，すなわち大学院レベル1カ年の修了者に対して，図書館学学士（Bachelor）の学位が授与されて来た制度そのものに対してであった。前者については，4年制課程の中で，一般教育を犠牲にした形で行われる図書館学，同時にこの課程の修了者に専門職員としての資格が与えることに対する反省であり，後者は大学院課程でありながら，実際には図書館学についての最初の学位が，二重学士号（second bachelor degree）という形で与えられる曖昧さに対する批判である。然しながら一面終戦と共に，専門職員の払底はいよいよ深刻を極め，これにインフレという特殊事情も伴って，教育基準を緩和する必要が起って来た事もその一因として挙げられている。いずれにしてもその間にあって，デンバー大学の図書館学部が行った改革，すなわち pioneering plan [9)] と呼ばれているものが，結局はその後の方向を決定することになったが，この方法は要するに大学院課程と4年制課程の双方を有機的に結び合せ，修士の学位を与える組織に変改することであって，コロンビア，シカゴ，イリノイ，ミシガン，エモリの各大学は率先してこの方法に倣い，図書館協会も1947年これを認定することになったもので，これが新制度修士課程[10)]と呼ばれている大学5カ年の課程に跨る新しい制度である。そしてこの方法が漸次普及されて行くに伴って，図書館学校を3種に分類認定して来た支柱が，実は全く失われてしまうことになったのである。現在の認定校32校は，いずれも最小限5カ年に跨り，第5年目は大学院課程とするもののみであって，自然 Type Ⅲ として分類された程度のものは除外され，結局は基準の高い学校の数が増加して来た結果となっている。ここに当然4年制課程中に於て行われる図書館学教育，すなわち前庭教育に対する基準の問題が新に発生することになるが，これに対しては，すでに1958年2月，これが作製発表されているのである。[11)]

然しながら，過渡期としての現代が，このような一応の解決方向をもって終っている訳ではない。なかでも最も困難で，なお未解決の儘に残っているのは，1949年に結成された全米認定委員会[12)]と図書館協会との関係である。謂わばこの国の総合的な認定機関として発足したこの委員会は，1952年2月全米の専門職団体に対して，別牒あるまで，それぞれの認定業務を停止するよう

8) Leigh, Robert D. *ed.* : Major Problems in the Education of Librarianship. N. Y., Columbia Univ. Press, 1954, p. 8.

9) Bryan, Alice : The Public Librarian. p. 326.

10) New five year program ; New Master programs ; "New plan" Masters' programs とか色々に呼ばれている。

11) Standards for Undergraduate Library Science Programs.

12) National Commission on Accrediting. この委員会の事務局長 Dr. William K. Selden から筆者に寄せられた書簡（1959.12.8）では，認定という仕事の非常に複雑であることに言及した後，「アメリカの教育関係者でも，この委員会の仕事とその理由の根本を本当に理解しているのは，至って少数の人だけである」と語っている。

指令した「認定停止令」なるものを発し，ために図書館協会もその要請に基づいて，認定活動の停止を一時行った程であるが，現在では再びこれを復活して今日に至っており，双方の認定事業が，将来どのように調整されて行くかに，今後の課題がかけられている現状である。

Ⅷ

図書館協会の教育部ならびに認定委員会の事業が，専門職としての社会的権威の保護に大きな役割を果しているとすれば，シカゴ大学図書館学部の発足はまた，図書館学の研究と教育の向上に，画期的な意義を有つものである。ホイーラーは，この学部が，図書館員の養成と図書館学に与えた影響の大きい点から言えば，ウィリアムソン報告や，上記教育部の創設以上であると語り，シカゴ大学の当時総長であったケッペル（Keppel）は，この学部が，ハーバード大学の法学部，ジョンス・ホプキンズ大学医学部の様な，第一級の学部と肩を並べて行くものになるであろう[1]，と語ったことが記されているが，その創立の経緯についてウィルソンは，図書館学教育に深い関心を抱く多くの図書館人ならびに図書館関係団体双方からの要求に応えて実現の運びに至ったこと，そしてその関心というのは，図書館学校の一つは，図書館学に関する高度の研究と調査とに専念出来るよう，偉れた大学の一つと結び付けて設けられるべきであるということであったと述べている。

この学校の設置がシカゴ大学に決定した背後には，ウィリアムソンと協会教育部双方の推せんがあったことは言うまでもないが，このような学部の創立を必要とすることは，またウィリアムソン報告の中で詳細に論ぜられ，勧告されているところである。すなわち彼は「高度な研究」[2]（第12章）という一章を特に設け，その中で，公立・私立の公共図書館のみならず，非常に種類の多い図書館が急速に発展して来た現在では，図書館学の教育も特殊化と高度化とを必要とし，自然大学卒後1カ年の課程をもってしては，到底不可能な事態となって来たこと，一方また大学関係の指導的図書館人からは，図書館学校の教育には，学術的な性格を伴う特殊な参考事務や研究活動に合致するような教科の準備がなされていない点が批判されていると共に，この国にもドイツのディアツコ（Karl Dziatzko）が，ゲッチンゲン大学において与えたような学術的な図書館業務を必要とすること，更らにそれを実施するとすれば，ハーバード，エール，プリンストン，ミシガン，シカゴ，ミネソタ，コーネルなどの大学においては可能と考えるとまで言われて来たことを述べて，Advanced Study を与える学校設立の必要を勧告しているのである。彼がここで，言及しているその課程は，具体的には，図書館学第2年目以上のもの，すなわち第1年において，基礎的な一般学科を修了し，1カ年間第一級の図書館において実地の研修を経た上で，専門化した特殊課題に分れて行く後の課程，すなわち旧制度における修士課程第2年目以上を指し

1・5・9) Wilson, Louis R. : *Ibid.*, p. 51, 52, 54.
2) Williamson, Charles. C : Training for Library Service. Chapter XII, Advanced or Specialized Study.

ており，彼においては，Advanced と Specialized とは全く同意義に使用されているのである。

1926年に創立され，28年10月をもって開校されたこの学部は，当初より博士課程をもつ学部であり，これに次いではイリノイ，ミシガンの両大学が1948年に，コロンビア大学が1952年，カリフオルニア大学が1955年，ウェスタン・リザーブ大学が1956年に，ラドガス大学が1659年という風に，結局7つの大学にその課程が置かれるようになったとは言うものの，この大学に次ぐものとの間には22年という長い間隔が存在している。いずれにせよこの学部については，図書館学の未開拓分野を切り拓いて行くことにその究極の目的がおかれているとか[3]，図書館学における社会学的研究を企図するものであるとか[4]，色々な表現が与えられているが，その高い評価は，図書館学ならびにその研究の上に全く新しい考え方を打ち出した点である。

ウィルソン教授は，1933年その学部長に就任した際におけるその学部教授団の構成の上に見られた変則（irregularity）について語り，これが，この学部の特殊な研究と教育上の業績を築き上げて行った重大な要素である点を強調している。[5] すなわち7人の構成員の中，正しい経路とでもいうべき，他の図書館学校から迎え入れられた人というのは一人だけであって，他は教育行政家，社会心理学者，中世学術史専政者，アラビア写本の権威，図書館人，稀こう書の権威など，図書館のことだけを常に念頭においているような人には，一見驚きの目をみはらしめずにはおかないものであったとも述べている。然し彼はこの「変則」こそ，実は学部の価値を数倍にする結果になったとし，その理由として，こうした人々は他の分野における教科課程，その実施の細かい点に詳しい反面，すでにコチコチに固ってしまっている図書館学の一般的な教育課程に対しては，何らの拘束を感じないのみか，図書館学が，その学問的な内容を豊にして行くためには，是非共導入して来なければならない書誌学や，歴史学・教育学・心理学・社会学などに造詣の深い人許りであって，こうした教授団の変則的構成が，司書職の世界に与えた影響は，謂わば健忘症の人や精神に異常を来しているものを，現実の世界に引戻す場合，時として必要とされる「衝撃」にも似たものであり，実際には，メルビル・デュイに依って長い間に固められ，当時といえどもなお十分にはそれから離脱出来ないままでいた「実際技術への献身」から，図書館学を揺すぶり放して行くのには，このような激動が実際には必要であったと付け加えているのである。

この学部の研究活動は，すでに30冊に余る図書館学研究双書[6]，1930年以来の季刊「ライブラリー・コータリー」誌の刊行，広く図書館人や学者を対象とし，緊急課題を採り上げての会議・学会・討論会の開催などを通じて多彩に展開されており，高い水準に立つユニークな業績は周知のことであるが，他面学生個々に対する教育の実際面においても，批判的・科学的態度の要請，具体的には，仮説の域に留っている未解決な問題に対する挑戦，そうした問題の解決に要する実

3) Danton, Periam J. : Education for Librarianship, p. 8.
4) Bryan Alice:*Ibid.*, p. 309.
6) The University of Chicago Studies in Library Science.バトラーの著は，この第1冊である。

験的技術の考案，総じて真摯な研究態度の育成をもって知られているが，なお更にこの学部の功績に数えられているものに，この国においては長く欠けた儘であったと言われている図書館学哲学（philosophy of librarianship）の発展という面がある。そしてバトラー教授の「図書館学入門」[7]が，この面の功績を大きく担っていることは言うまでもない。

ムンテによって，この書物は，色々な観点から，図書館学の科学的総合を企てた最初のものであり，図書館学哲学への道に踏み入る第一歩となったものであると言われているが[8]，更らにまたバトラーは，哲学的推理の広範で而も確実な方法を用いて，図書館のような社会的な機関を理解しようとすれば，これに絡み付いている社会的・心理的，更らには歴史的諸問題について，科学的な考察を加えることなしには，到底不可能であることをこの書によって提示した人であるとも述べており，ウィルソンもまた，この書物をもって，図書館学哲学形成の第一歩をなしたものとしている。[9]

書物それ自体の価値については今暫く措き，この書物が書かれた経緯は，そのまま，この国に於ける図書館学の大きな転機を物語っているものと言えよう。ムンテによると，1933年ウィルソンが，ワークス教授（G. A. Works）の後を襲って学部長に就任したとき，彼はこの学部に加えられて来た鋭い批判に対して，「ある種の弁明」を加えておく方が得策であると悟るに至ったと記している。[10]そしてバトラーの書物は，実のところ，ウィルソンの考えたところを展開するものとして著わされ，結果的には，この学部の「敷居を引上げる」ことに成功したというのである。今ウィルソンが，この書の序文に記しているところを一読すると，この書物はバトラーが，その抱懐するところに従って，先ず学問の本質を解説し，その学問の精神と方法とを適用した場合，重要な社会機関としての現代の図書館に関係ある諸問題は，どのように研究され得るかを提示しようとしたものであること，その点においては，同時に学部によってなされている図書館学へのアプローチの仕方，他面においては図書館問題に対する研究と調査の態度という2つの面を映し出しているものであると述べて，バトラーの所論と，学部の立場との一体的な関係について言及すると共に，当然そこには多くの図書館人による反論を予想し，ただそうした意見の相違如何に拘らず，この書に表明されているものに対し，耳を傾けるよう希望しているのである。

上述のような言葉は，要するに，この学部の採った方向に対して，懐疑と抵抗が強く存在していたことを物語るものである。ある種の弁明という言葉も，そうした人々に対して，学部の方針を説明する必要を指しているというこらが出来よう。ムンテはまた，図書館現場の人々から，この学部の教授たちは，司書職というものに本当に要求されているものは，一体何んであるかを全然知らない人々許りであると攻撃されたり，この学部の教科課程は，図書館現場の実際業務とは逆の方向に向いていると思われていた，とも記している。一方またバトラーは，「図書館人というものは，その仕事の理論的な面には恐ろしく無関心で，その点，社会活動の他の分野に在る人々とは趣を異にしており，明らかに彼らはプラグマティズムの単純な孤塁に立籠っている」ば

7） An Introduction to Library Science. Chicago, University of Chicago Press, 1933.
8・10） Munthe, Wilhelm : *Ibid.*, p. 151.

かりではなく，「科学を，それが心なき客観性をもつものであるがために，その到来することに恐怖の念を懐いている」[11]とまで極言しているのである。このような事情は，当然この学部と，図書館人との間に，軋れきの不可避であることを想察せしめるものである。

現場の図書館人によって加えられたこの学部への攻撃には，図書館学という学問それ自体の性格に対する懐疑に発しているものの外，この学部において行われているような長期に亘る教育が，図書館現場において果して必要であるかという疑問に基づいているものもある。当時カーネギー図書館の館長であったマン（Ralph Munn）が，図書館現場から見た場合，図書館学教育は，当時一般に行われていた通り，大学院基準の1ヵ年課程で充分であり，それ以上の課程は之を必要としないし本当に必要なものとなれば，それは書誌的・技術的な部門のものではなくて，先ず何よりも，もっともっと優れた一般教育であり，無限に必要とされるものは，書物に関する知識と加うるに実務の体験であると主張し，図書館学校が，実際業務から余りにもかけ離れて行きつつあることに不満を表明したのに対して，こうした見解を批判し，「マンと対決した」[12]とまで云われるカーノブスキー教授との間になされた論争[13]は余りにも著名であるが，彼によるとマンは，現代に於ける図書館の実情を，「この最善の世界に於けるあらゆる可能なものの中では，最良のもの」と見做す結局は現状維持者であり，「新しい形態を実地に試みようとすることに対しては，当然のこととしてその門を閉ざして終う」人であると語っている。カ教授は，1932年同学部より，図書館学博士号を授与されて講師となり，次いで助教授（1936—41），准教授（1941—44），教授（1944—　）と進んだこの学部生え抜きの，謂わば生粋の学究である。

Ⅸ

以上のように図書館学教育の諸類型をたどり，これにからまっているいろいろな問題を考察しようとしたのは，ただそのこと自体に特別の興味があったからではない。日本におけるこの面の教育は，戦後たしかに新しい段階に到達したということができるであろうが，同時に数多くの課題がそれに付随して生起している。専門職員の問題もその一つであり，これに対する正しい解決の方法も，図書館学教育の在り方についての真摯な検討を要請しているといえよう。いずれにしてもこの問題は，図書館の発展に至大の関係をもつものであり，本稿は従って更らにそれを考察して行くに際しての一つの拠りどころを，国際的な基ばんにおいて見出して行こうとしたものに外ならない。

---

11) Butler, Pierce: *Ibid.*, xi-xii.
12) Berelson, Bernard : Advanced Study and Research in Librarianship, *in* Education for Librarianship. p. 208-209.
13) Carnovsky, Leon : Why Graduate Study in Librarianship? *Library Quarterly*, Vol. 7, No. 2, Apr. 1937, p. 246-261.